

# 高校生の進路形成と学校生活

—学校文化論に関連して—

山梨大学 榊原 禎 宏

## 1. 問題の所在

本論文は、高校生の進路意識の生成と変容が、彼らの学校生活といかに関連するかの分析を通じて、生徒文化における進路形成の位置を検討するとともに、学校文化論を踏まえた学校経営の方向性について考察することを意図している。すなわち、①これまで主として教育社会学によって進められてきた、学校の文化的特性に関する論議の経過と到達点を整理する。②そこで明らかにされる生徒文化論の課題を、進路形成という観点から分析する。③これらの作業を通じて、生徒の進路形成を学校経営にとってのいかなる契機と見るかについて考察する。

さて、教育機関としての学校が人々の「平等」を実現しうるか否かという問題は、古くからの研究関心のひとつであった。たとえば1960年代当初は、すべての人々への教育機会の保障が国民に等しく知識・技術を獲得させ、主体的人間として社会への参加を可能にすると考えられていたと言えよう。しかし、アメリカでのヘッドスタート計画の結果にも示されるように、教育機会の均等化を通じての人々の平等化政策は成功せず、コールマン・レポートでは、学業達成に対する家庭の影響の大きさと学校の無力さが指摘されることとなった。教育機会の平等の問題は、「結果の平等」という新たな評価基準をめぐる論議を呼び起こしたのである。

学校教育が人々の平等化を実現しないばかりか、不平等な社会構造を再生産する役割を果たしているという主張が本格的に展開されるのは、70年代に入ってからである。広く再生産論と呼ばれる諸論は、学校が階級・階層構造に適合的に人々に「身分」文化を獲得させることを述べる。階層によって異なる文化体系を背景にして人々は自主的に価値規範を選択するのであり、その過程で彼らと学校との関係も決定されるとする。P. ウイリスの描いたイギリスの労働者階級の学校への態度は、彼らの主張を裏付ける典型的な事例となっている。<sup>(1)</sup>

以上のような、学校で扱われる知識や技術そのものが特定の階層にふさわしく編成され、価値づけがなされているという、これまで自明視されていた学業達成の普遍性への基本的な疑義の提出は、大きなインパクトを持った。そして、次のような研究テーマが深められることとなった。はたして、学校ごとの文化的状況はどのように異なっているだろうか、そしてその相違は、社会階層に対応したものと見ることができのだろうか。もしそうであるならば、学校の社会的機能はいかなるものか。つまり、社会構造の再生産と学校の文化的特性はどのように関連しているか

が、学校内部過程への注目と関わって問題とされるようになったのである。

わが国の場合、全体社会の下位文化としての学校文化は、もっぱら生徒文化として論じられてきた。それは、学校に通う生徒がどのような意識あるいは行動特性を有しているかの分析を通じて学校ごとの生徒の違いを明らかにし、それらと学校の置かれている社会的状況との関係を検討してきたのである。

こうした流れにあって、およそ70年代後半までの研究<sup>(2)</sup>においては、学校の文化的特性が主として生徒の学業成績との関連で語られていた。すなわち、入学試験の結果に代表的に示される学業達成の水準の高低によって、生徒の学校に対する態度は、「向学校-反学校」意識あるいは「積極的-消極的」意識を軸として規定される。学校での規範に同調する下位文化は、学業達成の高い生徒の層に多く見られ、逆にこれに否定的な下位文化は、学業達成の低い生徒に特徴的である。つまり、学校に対する生徒の意識特性は、高校受験という「輪切り」を通じて、学校(群)ごとに基本的に決定されているとする。

一方、主に80年代に入ってから研究<sup>(3)</sup>は、学業成績を尺度とした学校階層の存在を否定しないものの、そうした学校階層と学校の文化的特性とは生徒の意識の次元において一対一対応するのではなく、それぞれに異なる社会化を通じて、新たな学校特性が形成されることを主張している。たとえば、進学校と見なされる高校と「底辺校」の高校とでは、高校での「規範的期待水準」の違いが存在する。よって、それぞれの学校における生徒の自己充足感あるいは地位満足感は、各高校の要求水準によって異なるというのである。つまり、進学校だから生徒の自己充足感が強いとは限らず、かえって進学校ゆえの激しい受験競争から、現在の生活への不満や自己本来感の欠如が認められる。また、非進学校で「学校偏差値」も低い高校では、同じような境遇の生徒と交流をすることでこれまでの自己イメージを修正し、新たな目標に向かって意欲的な傾向が生まれるとする。

以上の諸論の展開から、現在、論議は1つの焦点を持つに至っている。それは、学校の文化的特性が社会階層の再構成といかなる整合関係を有しているかということである。このことを概略化すれば次のようになる。主として70年代までの論議は、学力を尺度とした階層構造の反映として学校の文化的特性を捉える傾向が強かった。学力に基づく学校階層が社会階層に直接的に対応すると見る場合、この論は、各階層の学校に生徒を配分することによって社会階層の再生産とその正統化が図られるという立場を取る。これに対して、80年代の論議は、学校ごとに特徴的な学校文化が存在するのであり、それぞれが生徒に対して独自の社会化機能および選抜機能を果たしている、すなわち学校の機能の相対的独自性に力的を置く傾向が強い。その独自性は学校ごとの文化的特性によって記され、とりわけ、生徒文化は学校の文化的特性を強く規定するというのである。では、後者の言う学校の社会化・選抜機能は、社会階層構造の再生産過程においていかなる役割を果たすのだろうか。またそのことは、社会に対する学校機能の相対的な独自性をどのように支持しうるのであろうか。

本稿では以上の問題意識から、生徒文化の一領域としての高校生の進路意識、とりわけ進学への意識と彼らの学校生活意識等の関連を解明することによって、高校における進路形成の観点について、上記の問題に関わる知見を提出したい。つまり、彼らの進路に対する意識の生成・変容は何と関連するのか、そして関連する諸変数を学校での教育活動を通じて操作することが可能ならば、それはいかなる経営上の方策として具体化されうるかについて、示唆を得ようとするものである。

## 2. 生徒文化における進路意識

学校文化の下位文化としての生徒文化において、進路意識とはいかなる位置を占めると考えられるだろうか。ここでいう進路意識とは、生徒が高校卒業後、どのような方向を取ることを希望、予定、あるいは未決定であるかを指す。それは、具体的には大学、短期大学、専門学校などへの進学、就職やそれ以外の進路、または不明の状態をも含むものである。

学校へのインプットとアウトプットという図式によって、生徒に対する学校の機能を考えると、学校に入学した時点においては、生徒が等質的な内容であっても、ブラックボックスたる学校での経験がそれぞれの生徒に影響を及ぼし、彼らが学校を離れるときには質的に異なった内容を持つという流れを想定することができる。学校での経験を通じた生徒の変容こそが、学校の相対的に独自の機能の存在を裏付け、基本的に外的社会に規定されながらも、学校のなしうる領域のあることを示すのである。こうした理解は、広義の生徒文化を各学校の社会的位置の従属変数として、これが生徒の進路意識に影響を及ぼすという論理を構成する。そして、これら生徒文化の上位概念である学校文化のうち、組織的、計画的作用を及ぼす部分を学校経営に関わる領域として、その実践的可能性を展望することができるのである。ここでは次の命題に答えることにより、学校機能の相対的独自性をめぐる問題に関わる生徒の意識分析を進めたい。

ひとつは、生徒の進路意識が彼らの学校体験や自己評価意識等をいかに反映するものとなっているかどうかである。たとえば、これまでの学校生活を楽しかったと考える生徒にとって、さらなる進学は志望されやすい方向であろうか、逆にそうでなかった生徒にとってはどうであろうか。あるいは、それらの選択は、彼らのいかなる自己評価意識と関連しているだろうか。またその場合、大学や短大のいわば直線的な進学志向と、専門学校という職業準備とリンクした進学志向の違いは見られるだろうか。ふたつめには、高校進学がほぼ義務教育化しているわが国の状況に関わって、これまでの学校体験のいかにかわらず、進学志向の強さが全体として見られるかどうかということである。これらの作業を通じて、進路意識を説明する諸変数の規定力を検討し、学校経営にとっての進路形成の意味について考察したい。

### 3. 調査の方法と結果

#### (1) 調査の方法

本論文では、高校生への悉皆調査から得られたデータを用いる。それは、ある大学区制下の単独選抜制の普通科高校に1987年に入学した高校生を対象とした、継続的質問紙調査の一部である。<sup>(4)</sup> この調査は、高校の協力を得点を得て1年生から3年生の各学年にわたり4回の質問紙調査(第1回:1年4月,第2回:1年10月:第3回:2年4月,第4回:3年4月)を実施したほか、生徒の教科成績の一部についても一定の統計的処理を施した後これを利用することができた。つまり、高校に入学してから高校3年生に至るまでの生徒の教科成績と彼らの調査票に対する回答を得ることができたのである。ここでは、次に示す教科成績、学校生活意識、自己評価意識の3つの領域を中心に、生徒の進路意識との関連を検討する。

##### ① 教科成績

本稿では、生徒の入学試験、1年生および2年生における英語・数学の成績を扱う。2年生の数学は、代数幾何と基礎解析に分かれている。これらの成績については、高校より提示されたいわゆる学力偏差値  $[(\text{生徒の得点} - \text{平均点}) / \text{標準偏差}] \times 10 + 50$  を用いる。したがって、以下論述される成績の上昇や下降とは、学年全体における生徒の位置の相対的な変化を示している。

なお、ここでは学力偏差値を次の5つのランクに分けて、第1・2:下位群,第3:中位群,第4・5:上位群と命名する。(第1ランク $<35$ ,  $35 \leq$ 第2ランク $<45$ ,  $45 \leq$ 第3ランク $<55$ ,  $55 \leq$ 第4ランク $<65$ ,  $65 <$ 第5ランク)

##### ② 学校生活意識

学校生活意識および自己評価意識の結果の数値化にあたっては、5選択肢のうち「あてはまらない」に1、「どちらかといえばあてはまらない」に2、「どちらともいえない」に3、「どちら

表1 学校生活意識質問項目

勉学志向関係	(1) 興味ある科目の勉強は、自分でどんどん進めている。 (2) 授業中は熱心に勉強している。 (3) とくに先生から指示されなくとも、予習や復習をしている。 (4) 職業に役立つ技術や知識を得るために勉強している。
学校帰属感関係	(5) 高校卒の学歴がなければ困るので、仕方なく高校に通っている。 (6) 高校に進学するよりも、専修学校に行ったり、就職した方がよかったと思っている。 (7) 高校生活を通じて、とくに何かを得たという気がしない。 (8) 高校生活で熱中できるものは見当たらない。 (9) この学校に通っていることに誇りを感じている。 (10) 学校に行くことが楽しみである。 (11) もしできることなら、この学校から転校したい。

かといえばあてはまる」に4, 「あてはまる」に5の各点を与えて各項目の得点を計算し, さらにカテゴリーごとに1項目あたりの平均点(S)を算出する方法を取った。そして, 平均点によって次の3つの群に区分した。(1 ≤ S ≤ 2 : 下位群, 2 < S < 4 : 中位群, 4 ≤ S ≤ 5 : 上位群)

分析する調査項目は, 表1の通りである。ただし, (5), (7), (8), (11)については, 反学校帰属感をたずねる内容となっているため, 便宜的にこれらの項目の得点を他の項目と逆転して換算した。ここでは, 勉強志向(4項目)と学校帰属感(7項目)と考えられる2つのカテゴリーについて検討する。

### ③ 自己評価意識

まず, 自己評価意識を類型化するために, 表2に示す28項目について各調査ごとに主成分分析を行なった。しかし, 主成分分析は質的変数の分析には必ずしも適切ではなく, また固有値1以上を基準にして見た主成分の累積寄与率が57~59%であるため, すべてを説明するには不十分である。このように生徒の自己評価意識を全体として理解することは困難であり, ここでの結果も一例に留まることを断わらねばならない。

表2 自己評価意識質問項目

(1) 自分の能力を最大限に伸ばせるよう, いろいろなことをやってみたい。	(15) 人とうまくやっていける方である。
(2) 他の人にはやれないようなことをやりとげたい。	(16) どんな不幸に出会ってもくじけないだろうと思う。
(3) 将来立派な仕事をしたい。	(17) 勉強や運動について自信をもっている方である。
(4) 将来他の人から尊敬されるような人間になるだろうと思う。	(18) 自分を頼りないと思うことがある。
(5) 自分の理想に向かってたえず向上していきたい。	(19) 今のままの自分ではいけないと思うことがよくある。
(6) 新しいことやちがうことをいろいろしてみたい。	(20) 現在の自分に満足している。
(7) 自分の主張を通す方である。	(21) ときどき自分がいやになることがある。
(8) 一度自分で決めたことは途中でいやになってもやり通すよう努力する。	(22) 人より劣っているのではないかと思うことがよくある。
(9) 他の人に認められなくとも, 自分の目標に向かって努力したい。	(23) 他の人からどんなうわさをされているか気になる方である。
(10) 何でも手がけたことには最善をつくした。	(24) 自分が少しでも人から見られたいと思うことが多い
(11) 現在の自分が幸福だと思う。	(25) 小さいことをよくよくと考えることが多い。
(12) 努力さえすれば成績はよくなると思う。	(26) 何かをしようとする時他の人が反対するのではないかと心配になる。
(13) チャンスを逃さなければ, 能力のある人は偉くなれると思う。	(27) 自分の心が傷つくようなことを恐れている。
(14) 人の一生は案外偶然のでき事で決まるものだと思う。	(28) “あんなことをしなければよかった” とくやむことが多い。

しかし、主成分分析の結果に共通する項目は、梶田徹一が述べる自己評価意識の3側面<sup>(5)</sup>をそれぞれ示しており、その内容からして妥当性を有すると考えられる。そこで、本論文では主成分分析による分類を参考にして質問項目を整理し、以下の6分類、22項目について分析を進める。

不安	・・・	項目番号	23, 24, 25, 26, 27, 28
意欲	・・・	”	1, 2, 3, 5, 6
劣等感・内省	・・・	”	18, 19, 21, 22
努力	・・・	”	8, 9, 10
満足	・・・	”	11, 20
運依存	・・・	”	13, 14

## (2) 調査の結果

### ① 進路志望と教科成績

図1は、各調査の直前の学期における進路志望ごとの成績上位群の割合を示している。これは数学と英語について、各ランクに属する生徒の割合を平均化したものである。また「その他」の進路選択はいずれも全体の約2%に過ぎず、その内容も多岐にわたるため、以下では扱わない。

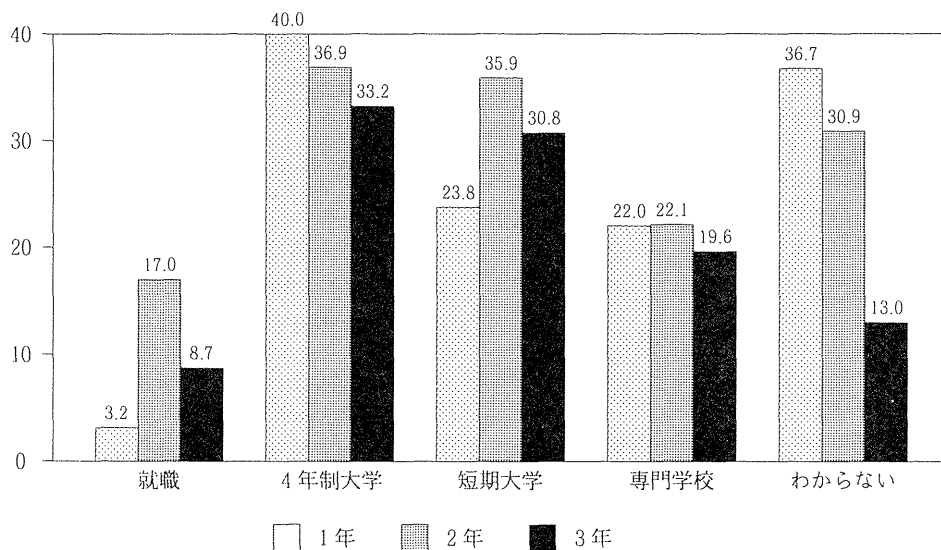


図1 進路志望ごとの成績群の割合(%)  
[上位群]

まず、1年時調査の場合、教科成績が第4ランク以上の生徒の割合で見ると、「わからない」を除いていずれも大学、短大、専門学校、就職の順に高い。続く2年時では、就職志望の生徒に

おける上位群の割合は上昇するが、その順位の変化は見られない。3年時についても同様である。つまり「わからない」という回答（1年時で全体の25.7%，2年時21.5%，3年時4.6%を占める）を除いた場合、すべての学年において大学・短大進学，専門学校進学，就職の順に，成績上位群の生徒の多いことが認められる。

逆に，成績ランクが1あるいは2という下位群の割合で比較すると，各グループ全体のうち大学志望では約20～35%，短大では約15～40%，専門学校では約30～65%，就職では約40～90%，「わからない」では約30～50%の生徒がそれぞれを占める。その割合は上位群の場合と全く逆転しており，大学，短大，専門学校，就職の順に占有率は低く，成績が下位の生徒ほど進学志望者の少ないことが明らかである。しかし，大学志望者の増加（学年全体の43.2%→48.9%→58.6%）および彼らのうちの上位群の割合の低下に見られるように，学年が進むにつれて進路志望と成績との相関が弱まっている点にも注目する必要がある。

## ② 進路志望と学校生活意識

学校生活意識として取り上げた勉学志向及び学校帰属感と進路志望との関連を，上位群及び下位群について整理したのが，表3である。

表3 進路志望ごとに見た学校生活意識

進路志望	勉学志向 (%)			学校帰属感 (%)		
	上位群/下位群		平均得点	上位群/下位群		平均得点
	1 年 生			1 年 生		
就 職	0.0	37.5	2.33	12.5	6.3	3.17
4年制大学	11.0	11.9	3.06	34.8	2.2	3.57
短期大学	3.7	4.9	2.96	23.5	0.0	3.55
専門学校	7.4	16.7	2.75	11.1	7.4	3.22
わからない	2.3	16.5	2.74	17.3	3.8	3.32
	2 年 生			2 年 生		
就 職	9.5	28.6	2.58	19.0	0.0	3.43
4年制大学	8.5	9.2	3.10	28.0	1.9	3.56
短期大学	2.4	8.2	2.99	32.1	0.0	3.64
専門学校	4.7	25.6	2.67	16.3	7.0	3.27
わからない	0.9	16.7	2.74	21.7	1.7	3.34
	3 年 生			3 年 生		
就 職	17.4	17.4	2.82	22.7	9.1	3.27
4年制大学	11.8	9.3	3.26	28.0	1.7	3.56
短期大学	8.5	10.3	3.11	28.4	0.9	3.57
専門学校	5.7	17.1	2.81	22.2	2.8	3.43
わからない	4.3	26.1	2.58	8.7	4.3	3.19

勉学志向に関しては、平均得点で見た場合、教科成績における順序と同じ傾向を示しており、大学、短大、専門学校、就職の順に高い。上位群については、「わからない」がいずれも最も低い以外は、明確な違いは見られない。下位群については、大学あるいは短大志望の生徒で各10%前後と一貫して最も低く、専門学校、就職においては約20～40%とその率が比較的高いことがわかる。しかし、3年時での就職志望生徒の上位群の上昇、志望別の平均得点の接近は、勉学志向が進路志望によってより分化するのではなく、むしろその逆の方向を取ることを示している。

一方、学校帰属感については、いずれの志望においても下位群の割合が極めて低く、学年全体でもその割合が3.1→2.4%へと、高校での経験を通じた学校帰属感の上昇が認められる。このことから同校の多くの生徒は、全国として学校に通うことに積極的であり、あるいは楽しく学校生活を過ごしていることがわかる。また、志望の違いごとに見ると、1年時では大学34.8%、短大23.5%、専門学校11.1%、就職12.5%という率を示すが、2年時では短大志望が最も高くなり、3年時ではどの志望ともその差が極めて小さくなっている。平均得点で見た場合でも勉学志向と同様に、就職、専門学校を選択する生徒のスコアが上昇しており、その順位に変動はないものの、明らかな違いとは言えなくなっているのである。

### ③ 進路志望と自己評価意識

自己評価意識と進路志望との関連については、あまり明確ではない。1年時では、就職志望の生徒が、不安、意欲、努力、満足において他の進路志望をした生徒を下回るものの、他の志望間ではあまり違わない。また、2年時、3年時ではいずれも差が見られない。あるいは、劣等感、内省、運依存の3カテゴリーについてはほとんど相違ない。意欲、努力、満足については、進学

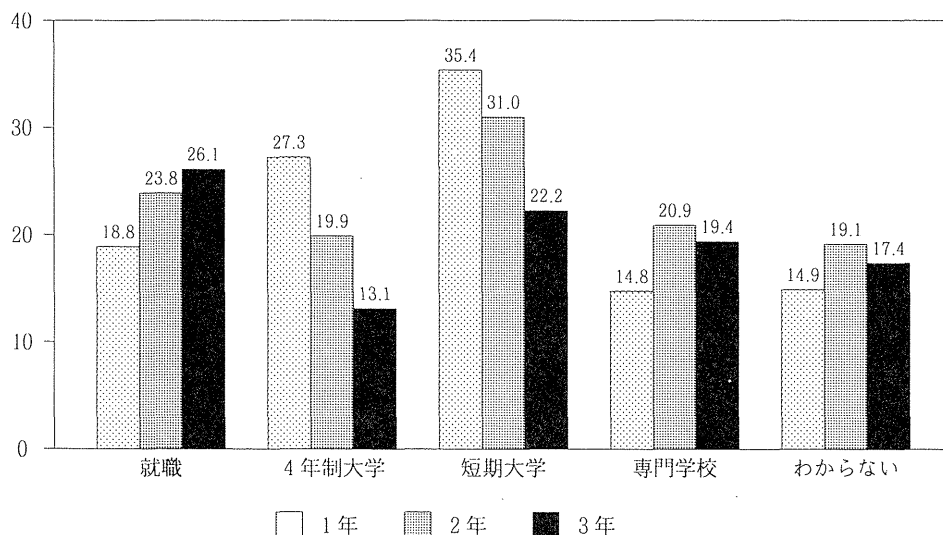


図2 進路志望ごとの自己評価意識  
上位群 [「満足」] の割合 (%)



志望群において他の領域での場合と同じ傾向であるが、その傾向は学年が進むほど弱まっている。このうち「満足」について上位群の割合を整理したものが図2であるが、大学、短大志望者での割合の低下に対して、就職を志望する生徒の意識の高まりがとりわけ3年時において対照的である。非大学志望あるいは非進学志望であっても、意欲や努力、あるいは満足への傾向は決して弱くなく、それらの逆の志望の場合が必ず高いとも言えない。ここで見る限り、進路志望による自己評価意識の傾向は特に認められないのである。

#### ④ 生徒個人について見た進路志望の関連性

①～③では、進路志望と諸領域との関連を学年全体において検討してきた。その上で生徒に及ぼす学校の影響をより明らかにするには、生徒個人がどのような変化を遂げているか否かを問わねばならない。これまでの分析から、教科成績や勉学志向と進路志望との関連を一定程度認められるが、さらに個人について確かめることによって、学校での諸経験の意味をよりマイクロレベルで探ることができると考えた。具体的には、生徒の進路志望を1年から2年、2年から3年の2つの時期について、それぞれの間の彼らの進路志望の異同と成績等の諸領域の変化とをクロス集計し、それらの関連を検討した。

しかし、これらの作業の結果はそのほとんどにおいて、個人レベルでの関連を裏付けるものとはならなかった。たとえば大学進学に志望が変化した生徒の多くが成績の上昇を示した、あるいはその逆の生徒において学校生活意識や自己評価意識の上昇あるいは低下ということは、ごく一部の結果を除いて確認できなかった。このことは1年から2年、2年から3年のいずれの時期についても同様である。ただし一点だけ明らかとなったのは、2年から3年への時期において「わからない」から大学、専門学校等への進学志望へと変わった生徒の場合、その多くが勉学志向と学校帰属感の高まりを見せるということである。

「わからない」からの他への変更については、大学への変更の場合は勉学志向で50.0%、学校帰属感で45.1%の生徒が上昇、短期大学への場合では55.6%、57.1%、専門学校では57.1%、71.4%が上昇を示す。上昇：変化なし：下降がおおよそ4：2：4で見られる他の選択パターンとこれらを比較すると、進路志望の変更が彼らの意識の変化と関連していることを窺える。つまり、進路志望の具体化は、彼らの意識変化の原因あるいはその結果と理解できるのである。ここでは、進路志望が具体的になることを通じて、彼らの成績や対学校意識に変化が起りうることを確認するに留めたい。

## 4. 考察

以上、学年レベルおよび個人レベルについて、3つの領域と進路意識との関連を検討した。これらの作業から次の内容が得られた。①進路意識は教科成績と強い関連を持つほか、勉学志向や学校帰属感ともある程度の相関が認められる。②しかし、自己評価意識との関連は明確でなく、

進路による意識の違いがあるとはここでは判断できない。③教科成績や勉強志向、あるいは自己評価意識の一部と進路意識との間に見られる相関は、学年の進行とともに弱まる傾向にある。④個人レベルでの分析では、教科成績、学校成績意識、自己評価意識のいずれも、進路との明確な関連は見出されなかった。

さて、これらの結果をどのように理解することができるだろうか。第一には、高い教科成績や強い勉強志向あるいは学校帰属感という、学校に適應するうえで重要な要素を持つ生徒にとっては、大学あるいは短大への進学志向が強く、次に専門学校を選択する割合が高い。つまり、学校での勉強に意欲的でかつ学校に通うことが楽しいといった、学校生活に適應している生徒は、自らにとって快適な場である「学校」を次の進路として選択しやすい。逆にこれまでの学校体験が否定的な生徒は必ずしも学校に適應していない自分を認めるがゆえに、学校を次の進路として選ぶ場合が少なくなっていると考えられる。

このことは、クラブ活動への参加を見ることによっても追認できる。クラブ活動への参加率は、いずれの志望においても学年が上がるにつれて徐々に低下するが、大学志望の生徒では、53.2→47.7→41.2%、短大では37.8→43.6→40.2%であるのに対して、就職志望の生徒の場合は、18.8→28.5→26.1%である。とりわけ大学志望者は、3年時でも全体の31.6%が体育系クラブ活動に参加しており、平均的に活動時間が長いと考えられる体育系への参加の多さは、彼らが学校に適應していることを示すものと捉えられよう。

第二には、高校の初期においては比較的明らかであるが、学年が進む中で次第に弱まる進路意識と諸領域との関連については、2つの説明モデルを想定することができる。そのひとつは、高校での経験が増えるにつれて、入学当初の对学校意識の反映としての進路意識という位置関係が変化したという理解、ふたつめには、調査票でだすねたような高校生活の直接の領域とは別の要因によって、進路意識に対する規定力が強化された結果という理解である。前者のモデルを採用する場合、高校における多様な経験が生徒に影響を及ぼし、彼らの進路意識とは別に諸意識を生成・変容させたことになる。つまり、高校生活の最初の時期は、成績が良いから大学に進学する、あるいは学校が嫌だからすぐに就職するという傾向が強いが、それが学校での経験を通じて変化し、彼らの進路の選択とは直接の関わりなく、それぞれの对学校意識あるいは自己評価意識を形成するというものである。その場合、先に確認した学校適應と進学志望との関連を支持する説との論理的整合が求められるが、学校帰属感、自己評価意識については、このモデルに基づく検討の余地がある。

また、後者のモデルを採用する場合、生徒の進路意識は調査で想定した項目に見られる学校での諸経験とは異なる要因の影響を受けたことになる。たとえば、3年時の「わからない」の激減、あるいは短大志望者の増大とその女性による専有(82→85→117人、97.6%→100%)は、とにかく進路を決めなければならない、女性は短大の方が有利、あめいは4年間も大学に行かずともよいといった、生徒を取り巻く家庭環境や彼らが感じ取る顕在的・潜在的な社会的圧力の存在を示

したものと考えられる。その他、学校での進路指導のあり方も要因になりうるだろう。

これら2つのモデルを検討すると、いずれの場合でも、進路意識が学校生活の結果としての位置を常に占めるという理解は難しい。彼らの進路意識は、最終的決定をするまでの時間的距離が長い場合は現在の学校生活への評価に連なってイメージされるが、より進路の具体化を求められる過程で、これとは異なる要因に影響された進路形成が進行する。よって3年時の志望は、これまでの学校生活に対する理解に基づくものと直接にはそれ以外の要因によるものという、2つの内容から構成されていることが予想される。

このことは高校に対して次のような可能性と限界を提示する。教科成績の向上、勉強志向や学校帰属感の強化を学校での教育活動を通じて意図し、この実現によって生徒のさらなる進学への志向を形成することは一定程度可能である。しかし、3年生4月段階での(1)進学志向の顕著化、(2)女性の進学志向の短大への集中に見られるように、それまでの教育活動とは直接の関係なく生徒が進路を選択するのは、高校の教育目標が曖昧なゆえの結果でもあることを示す。つまり、国民教育としての完成機能と上級学校への進学準備機能あるいは義務教育の補償機能を求められる現在の高校は、その教育活動について「何のための高校」という問いへの回答を用意しきれないのである。とりわけ3年時点での進学志望者の急増は、大学あるいは短大への進学が「選ばれたエリート」としてよりも、むしろ「落ちこぼれ」ないための進路志望と考えられるのではないだろうか。そしてこのことは、今日状況に限らず、「貧しいほど学歴を羨望するという逆説的『進学文化』」<sup>(6)</sup>を生みだしたとされる日本の中等教育の歴史的特質として理解されるべきものではないだろうか。

さらに、彼らの進路志望と強く相関する教科成績は、ここでは相対的な評価に基づくが、生徒の成績認識がこれに依ると考えた場合、同一学年内における成績群の割合は全体としては変化しない。すなわち、生徒の進路選択の傾向についても、学校内での大きな変化をもたらすことは困難という結論を導くのである。

なお、学年全体で明らかな傾向を個人レベルで確認できなかった理由として考えられるのは、教科成績については相対評価であることから、彼らの持つ成績評価意識と相対評価の間にはずれがあるのではないかということである。また他の領域については、生徒の意識の上昇、下降の程度は広範にわたるため、その幅の違いごとのより細かな意識変化の検討が必要と考えられる。たとえば、教科成績が比較的上位である生徒がさらに相対評価を上げることは難しい。彼らにとってはその地位を維持することが、積極的な勉強志向や進学志向と結びついていると考えられよう。個人の追跡調査については方法上の課題が残される。

## 5. まとめと今後の課題

これまでの分析から、生徒の進路意識は主として相対評価による教科成績と関連すること、ただしこのことは、成績評価を通じた学校による個々の生徒の意識変容を意味するものでは必ずしもなく、あくまでも学年集団としてその傾向が認められるということである。また、生徒の進路意識が高校の教育活動の集約点としての確かな位置を持ち得ていないという結果は、教育目標と進路形成との関係をいかに理解するかを改めて問うものとなっている。以上のことから、学校機能の相対的独自性に関する問題は、相対的に成績上位の生徒が進学志向を持ちやすいことから、「学歴社会」と呼ばれる社会構造の再生産の一端を学校が担っているとも言う。しかし、それはあくまでも学校内での上位であり、入試を通じた「輪切り」が高校入学時点で既になされているとすれば、各高校での進学志向は学校での相対的地位の認識に基づくとも考えられよう。後者の理解を採るならば、我々は学校制度のアーティキュレーションを区切りとして生徒がシャッフルされる一方、その段階を昇る過程を通じてほぼ同一年齢集団の単位で人材の選抜、配分が行進するという構図を描くことができる。

このように本稿は、進路意識に焦点化して成績に対する学校の影響の分析を試みたが、経験的に得られた以上の知見を提出することはできなかつた。それ以上のことについては仮説的な指示に留まっている。以下に課題を列挙してむすびとしたい。

①学校への適応の鍵となっている教科成績と勉学志向の内容分析、とりわけ教科成績に対する文化資本的考察。ここでは数字と英語の成績を平均化して分析したが、進路志望ごとの上位群の割合の違いがより明らかなのは英語であった。学校での言語中心的な学習内容・形態と関わって、各教科の特性と生徒の諸属性との関係が解明されなければならない。②生徒の教科成績認識についての学校内での相対評価の意味の解明。これまでの研究は、学校内集団における相対的成績が生徒に大きな影響を与えているという見解を取るが、この命題の再検討と同時に、いわゆる業者テストへの参加状況、学校での成績評価方法等と生徒の成績認識との関連分析が学校経営上の意味を持つと考えられる。③「職業科」高校や、より厳しいあるいはより緩やかな選抜を経た生徒の入学する普通科での調査分析。本稿では地元集中方式と呼ばれる地域での高校を対象としたが、学力を尺度にしたより広範な生徒で構成される、逆により狭い生徒から成る学校との比較が必要である。④生徒の変容に影響を与える学校の位置を明らかにするための研究方法上のさらなる検討。具体的には、生徒の属性と彼らの学校経験のいずれをも捉えうる、調査と実施と分析枠の精緻化が求められる。

### 注

(1) ウイリス・P. (熊沢誠/山田潤訳) 『ハマータウンの野郎ども』 筑摩書房 1985。

(2) 米川英樹「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』第4巻 1978、耳塚寛

明「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集 1980など。

- (3) 岩木秀夫「中・高校生の学校生活と進路形成－中等教育の構造と機能に関する研究(1)－」『東京大学教育学部紀要』第20巻 1980, 耳塚寛明・苅谷剛彦・樋田大二郎「高等学校における学習活動の組織と生徒の進路意識－高校生の生徒文化と学校経営(2)－」『東京大学教育学部紀要』第21巻 1981, 長尾彰夫・池田寛編『学校文化』東信堂 1990, 伴恒信「学校文化と生徒の意識」黒羽亮一・牟田博光編著『教育内容・方法の革新』教育開発研究所 1990など。
- (4) 同調査の詳細については, 金子照基編著『基礎学力の形成と教科経営－事例高校にみる学校改善の成果と課題－』ぎょうせい 1992を参照。
- (5) 梶田毅一『自己意識の心理学』[第2版] 東京大学出版会 1988 119頁を参照。
- (6) 伊藤彌彦「日本近代中等前期教育の形成と展開」望田幸男編『近代中等教育の機能と構造』名古屋大学出版会 1990 321頁。